

平成22年度校内研究の概要

1 今年度の研究の方向性について

(1) 昨年度の成果と課題について

※H21年度成果と課題 参照

参考として、昨年度の子どもの授業アンケートと教師の意識アンケート

(2) 研究の概要

テーマ「ひびき合う三の丸の子どもたち」  継続

研究課題・・・切実な問題意識を持ち、友だちと関わり合いながら学習する子どもの育成  継続

◎手だて・・・子どもの「切実な問題」を見とった授業づくり  継続

・・・豊かな言語活動のできる子どもを育てるための研修  継続

①研究課題と手だて設定の理由

子どもの知的好奇心をもとに単元をつくることは、昨年度の研究である程度共通理解し実践できたと考えている。しかし、子どもの知的好奇心が、必然性を持った問題となったかという点で疑問が残る。下に示す「授業をつくる」「単元をつくる」定義の中の、「必然性を持って問題発見・問題解決する」部分が欠けているのではないかということである。これからは、「何となくおもしろそうな課題」で「進む学習」をする子どもではなく、「本気で問題や友だちと関わろうとする」主体的な子どもを育てていきたい。その時の子どもの切実な問題意識とは何かを教師が見とり、子どもと共に学習をつくっていく過程で、単なる「関わり合い」ではなく「ひびき合い」の姿が見られると考えている。

「知的好奇心」と「子ども同士が関わり合う」ことは大前提とし、教師が子どもの切実な問題とは何かを見とって授業をつくることを、引き続き手だてとしたい。

「授業をつくる」
「単元をつくる」

友だちや教師との関わりを通して、必然性を持って問題発見・問題解決しながら学習が進む過程のこと。最終的には、単元のねらいを達成する。

②研究仮説

子どもの切実な問題を見とり授業をつくることで、ひびき合う姿が見られる

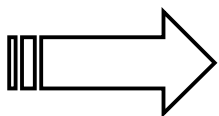
③研究方法（具体的な方法は後述）

一人年一回研究授業（国語、社会、算数、理科、生活、生活単元学習）、レポート報告会、子どもの意識実態調査

2 具体的な研究方法

(1) 授業のありかた（H20年度研究概要参照、これより継続のため、）

- ①教師の与えた教材が知的好奇心を喚起し、徐々に子どものものとなる学習
- ②子どもの知的好奇心がスタートかつゴールの学習
- ③子どもの知的好奇心が発展していく学習



どれがいいということではない。また、子どもから出たものでなければならないということでもない。子どもの切実な問題意識を教師がどう見とり授業をつくるかが大切。
教師・子ども・地域の個性を生かしてほしい。

(2) 授業形態

様々な場面で、**その時に必然性を感じられるような授業形態**をとる。ただし、前提は、一人ひとりが自分の考えを持っていること。

(例) クラス全体 グループ ペア

低学年では様々な形態を経験、中学年ではそれらのよさを実感、高学年では形態を自分自身で選択できるようになると一番いいが、まだその段階ではないと思われる。まずは、様々な関わり合いの場面を通して、子どもたちが経験と実感を持てるように教師が意識していくとよいのではないかと考える。

(3) 授業研究

①研究する教科、条件

- ・国語、社会、算数、理科、生活、生活単元学習。その他の教科は実践レポート報告会で。
- ・導入(単元1時間目)はなし→子どもが自分たちの切実な問題を解決していこうとする場面を見たい。
※ただし、個学は実態に応じて、好奇心を喚起する場面や導入でもよい。
- ・活動のみの研究授業にはしない→切実な問題を検証するための活動なら部分的に入っているもよい。
※全ての単元を(1)で述べたような方法でつくっていくことは無理なので、研究授業で行う単元について、子どもの切実な問題がどこにあるのかを見とり、授業をつくっていく。
- ・検討は、ブロックを中心にしっかりと行う。

②研究授業を行う時の留意点

- その一時間だけでなく、単元を通して、教師が子どもの切実な問題をどうとらえ、子どもたちは友だちや教師とどのように関わり合いながら、単元目標に達していくのかが大切。子どもが切実な問題として考えたことを扱う場面を研究授業として行う。
- 始めにたてた単元指導計画通りにいなくてもよい。あくまでもそれは計画。子どもたちの持った課題や思考の流れによっては、途中で変更もあり得る。

○指導案に、教師の考えを明記する。

③授業研究の視点

- 本時をもとに、授業者の願う授業を行うことができたかを考えていく。
- 本時の学習問題は適切であったか(子どもにとって切実な問題であったか)
- ひびき合いが見られたかどうか。
 - ・見られなかったとしたら、どこに問題があったのか。
 - ・見られたとしたら、どこがよかったのか。
- 授業者の願いと子どもの思考から、今後の授業をどのように展開していくことがよいのか。
- 子どもの言動をよく観察し、発言、反応、活動、表現物からひびき合いについて話し合えるように。
→本時をもとに、これからの授業をどのように展開するとよいか、という発展的な協議にしたい。

④研究会の持ち方

- 今年度は、早稲田大学教授 小林宏己先生にご指導いただく。
 - ・5月28日→講話、12月8日・1月30日→授業研究
- 全体研究会、ブロック研究会、選択研究会とする。(日程は後日提案)

⑤指導案 別紙提案 → **今年、教師の願いと子どもの見とりを明確にするために力を入れたい。**

(4) 実践レポート報告会(年4回)

- 主に、「聞く」「話す」に関する報告会を行う。
 - ・5月中旬…「聞く」「話す」という、学習活動の基礎基本となるようことへの取り組み方法レポートとして文書で出す。(スキルの側面、環境的側面、実践的側面から)
 - ・8月…夏休み前までの知的好奇心に関する授業実践レポート(A4一枚)
 - ・12月…冬休み前までに知的好奇心に関する授業実践レポート(A4一枚)
 - ・2月…5月の報告会を受けて、子どもたちに「聞く」「話す」という力が育ったか、改善点はどこか等、具体的な子どもの姿をレポートとして口頭で報告。